

領域8 インフォーマルミーティング議事録

開催日時：2025/3/20（木） 18:00-20:00

開催地：オンライン(zoom)

議長：永崎 洋（領域代表、産総研）

司会：迫田 将仁（運営委員代表、北大）

議事録作成：北谷 基治（書記、兵庫県立大）

出席者

領域代表（2024/4 - 2025/3）永崎 洋（産総研）

領域副代表（2024/4-2025/3）黒木 和彦（阪大）

領域運営委員（2024/4 - 2025/3）

迫田 将仁（北大/低温・実験）

足立 伸太郎（京都先端大/低温・実験）

北谷 基治（兵庫県立大/低温・理論）

佐藤 芳樹（東京理科大/磁性・実験）

（金子 隆威（早稲田高等研/磁性・理論）、欠席）

領域運営委員（2024/10 - 2025/9）

藤岡 正弥（産総研/低温・実験）

石塚 淳（新潟大/低温・理論）

東中 隆二（都立大/磁性・実験）

角田 峻太郎（東大/磁性・理論）

次期領域運営委員（2025/4 - 2026/9）

中埜 彰俊（名古屋大/低温・実験）

中山 耕輔（東北大学/低温・実験）

播木 敦（大阪公立大学/低温・理論）

井戸 康太（東京大学物性研究所/磁性・理論）

松本 圭介（愛媛大学/磁性・実験）

参加者：32名（上記出席者を含めて）

議題1：プログラム編集について（迫田）

今大会プログラムの概要

1. 全てのセッションがオンライン開催
2. 口頭発表は2会場の開催、初日午前から最終日午後までの計14セッション
領域3と2講演・領域7と1講演（各1セッション）を共催
3. ポスター発表は2会場開催の計2セッション
4. チュートリアル講演（1件）は1日目午前、若手奨励賞授与は2日目午前、シンポジウム講演（1件）は3日目午前
5. 学生優秀発表賞に8名がエントリーし講演を審査中
6. 講演申し込みは1月9日とこれまでより1か月ほど遅い

今大会の講演数について（申し込みベース）

【2025 春（オンライン）】

	口頭	ポスター	合計
低温	97	20	117
磁性	46	39	85
全体	143	59	202

アブスト提出率 領域8 94.8%
(参考：物性合計 95.4%)

【(参考) 2024 秋（北海道大学）】

	口頭	ポスター	合計
低温	211	78	289
磁性	95	76	171
全体	306	154	460

アブスト提出率 領域8 96.1%

【(参考) 2024 春（オンライン）】

	口頭	ポスター	合計
低温	124	34	156
磁性	48	33	81
全体	172	67	239

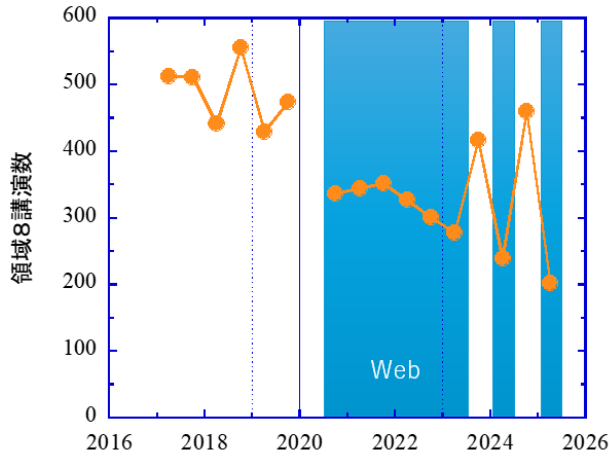
アブスト提出率 領域8 98.8%

2025 春 講演数まとめ

	申込件数	口頭件数	ポスター件数
素粒子論領域	138	138	0
素粒子実験領域	178	178	0
理論核物理領域	113	110	3
実験核物理領域	139	115	24
宇宙線・宇宙物理領域	139	139	0
ビーム物理領域			
sub total	707	680	27
領域1	85	84	1
領域2	70	69	1
領域3	105	79	26
領域4	69	60	9
領域5	74	57	17
領域6	73	66	7
領域7	42	37	5
領域8	202	143	59
領域9	57	36	21
領域10	46	41	5
領域11	233	199	34
領域12	67	59	8
領域13	77	77	0
sub total	1200	1007	193
合計	1907	1687	220

→アブスト提出率は高いものの、ゆるやかな減少傾向にあるため、周囲へのアブスト提出の周知が推奨された。

領域8 講演数の推移

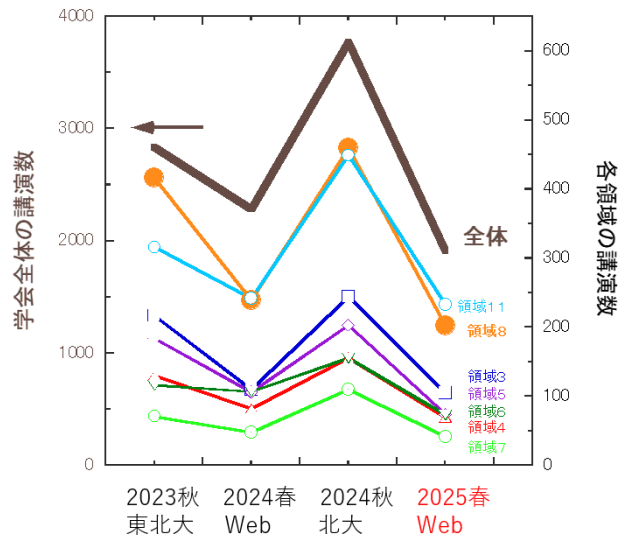


2025春	202 (Web)
2024秋	460 (北大)
2024春	239 (Web)
2023秋	417 (東北大)
2023春	278 (Web)
2022秋	301 (東工大+Web)
2022春	327 (Web)
2021秋	352 (Web)
2021春	345 (Web)
2020秋	337 (Web)
2020春	390 (コロナ中止)
2019秋	474 (岐阜大)
2019春	430 (九州大)
2018秋	556 (同志社大)
2018春	442 (東京理科大)
2017秋	512 (岩手大)
2017春	513 (阪大)

- ・ 2024 年秋の半分以下の講演数
- ・ オンライン開催での減少が顕著

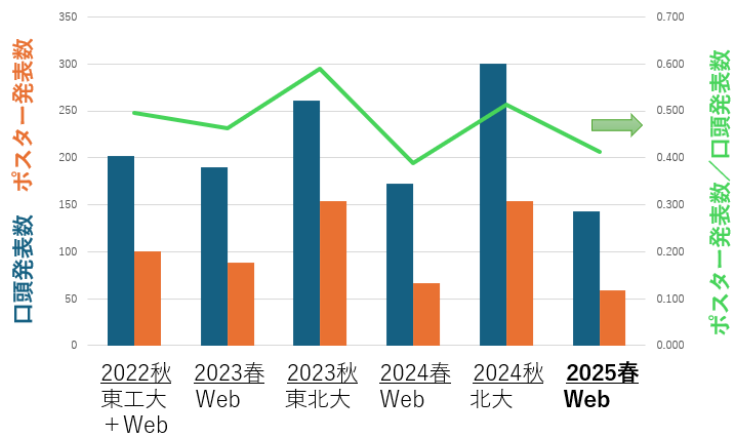
関連領域との比較

近年の傾向は領域13を除いて、他の領域でも同様。右図のように全体としての傾向となっている。



口頭・ポスター講演数の比較

- ・ ポスター発表数は口頭発表数の半分ほど。
- ・ オンライン開催では、特にポスター講演の減少が顕著。
- ・ 領域8 はポスター講演数が59件(全体 193件)と、学会全体の中で特に多い。



議題2：次期領域代表・副代表および領域運営委員の紹介（迫田）

次期領域代表 （2025年4月～2026年3月）黒木 和彦（阪大理）

次期領域副代表 （2025年4月～2026年3月）有馬 孝尚（東大新領域、理研 CEMS）

次期運営委員（2025年4月～2026年3月）

中山 耕輔（東北大学/低温・実験） 代表

中埜 彰俊（名古屋大/低温・実験） 学生賞

播木 敦（大阪公立大学/低温・理論） web 担当

井戸 康太（東京大学物性研究所/磁性・理論） 副代表

松本 圭介（愛媛大学/磁性・実験） 書記

上記次期領域代表・副代表、および運営委員（とその役割）の紹介があった。

議題3：次次期領域運営委員の推薦・承認（角田）

任期：2025年10月～2026年9月

比嘉 野乃花 （広島大学・磁性実験）（欠席）

水野 竜太 （大阪大学・磁性理論）

岡崎 宏之 （量子科学技術研究開発機構・低温実験）（欠席）

森本 高裕 （東京大学・低温理論）

次次期運営委員4名の簡単な紹介があり、出席された先生方からは一言挨拶があった。

次次期運営委員はこの場で承認された。

議題4：領域委員会報告（永崎）

2024年12月9日（月）13:00-17:50（Zoomによるオンライン開催）

1. 2025年春季大会 提案の採択

- ・招待講演：9件採択、0件不採択
- ・企画講演：1件採択、0件不採択
- ・チュートリアル講演：1件採択、0件不採択
- ・シンポジウム（一般）：8件採択、0件不採択
- ・シンポジウム（共催）：1件採択、0件不採択

すべての提案が採択されたとの報告があった。

領域 8 からの提案

・シンポジウム講演(20aH2)

「量子幾何駆動する物性物理学」 提案者 柳瀬陽一 (京大理)

・チュートリアル講演(18aH2)

「UTe₂ にみるスピン三重項超伝導のスピン磁化率の振舞い」 講演者 石田憲二 (京大理)

・若手奨励賞受賞記念講演(19aH2)

上田 健太郎氏 東大院工 「希土類化合物におけるトポロジカル交差相関物性の研究」

鬼頭 俊介氏 東大新領域 「強相関電子系物質における価電子軌道の可視化」

大同 暁人氏 京大院理 「有限重心運動量超伝導体における非相反応答の理論研究」

田財 里奈氏 京大基研 「新規カゴメ超伝導体 AV₃Sb₅(A=K,Rb,Cs)における多彩な量子相転移の微視的機構」

他領域からの提案

・シンポジウム講演 2件

「キラリティがもたらす新現象の開拓と制御 ～CISS 効果を中心に～」
主領域 07、合同領域 01, 03, 04, 05, 08, 10 提案者 加藤雄介 (東大総合文化) 18pG1

「中性子・ミュオンで加速する物性研究～J-PARC MLF1MW その先へ～」
主領域 10、合同領域 02, 03, 06, 08 提案者 竹下聡史 (KEK) 19aK1

2. 計算物理領域の新設について

今秋の第 80 回年次大会(2025 年)から 3 年間、試行期間に入るが、既存の領域の講演数が減らないようにするため、すべての講演を合同セッション扱いとするとの説明があった。また、合同セッションとして、「高性能計算」「計算アルゴリズム」「データ駆動科学」の 3 つのテーマが検討されており、合同領域の希望の有無についての希望調査が行われた。

領域 8 としては、3 つすべてのセッションについて合同セッションを希望するとの意見で一致した。その一方で、プログラム編成はどのように進めるのか？ 計算領域とだけの合同となるのか、希望した領域すべてが合わさったセッションになるのか？ など、具体的な進め方については不透明な点が挙げられた。

3. 講演概要の英語化について

講演概要の英語化について、領域委員会での議論が紹介された。領域による温度差が大きく賛否は分かれたが、全体として現状維持を推す声が多く、完全な英語化には否定的な意見が多い。(参考情報：物理学会員約 14000 人のうち、300 人程度が外国人)

その他の領域委員会での意見の例：

- ・ 学生や教員の負担に配慮し日本語を選択できるとよい（選択制にしてほしい）。
- ・ 英語を推奨するとしてはどうか。
- ・ 概要の提出率、および発表件数が低下することが懸念される。
- ・ 英語化は国際化につながり、外国からの参加者の増加が望めるのではないか。
- ・ 1 ページに集約し、日英併記としてはどうか。2 ページは負担が増えるのでやめてほしい。
- ・ 現在は精度の高い翻訳ツールもあるので、概要を無理に英語化する必要もない。
- ・ 翻訳ツールを使用すれば、英語が苦手な学生も英文作成は困らないのでは。
- ・ 英語化することがダイバーシティ向上には繋がらない。
- ・ 概要どころか発表自体も英語化しないと学生の英語力が向上しない。

→ 領域 8 は既に英語スライドの人も多く、英語化について抵抗が無いほうだと思われる。領域 8 としてはスライドの英語表示を推奨しつつ、推移を見守るという方向で一致した。

4. 物理学会の開催形態について

【同時翻訳字幕機能の導入について】

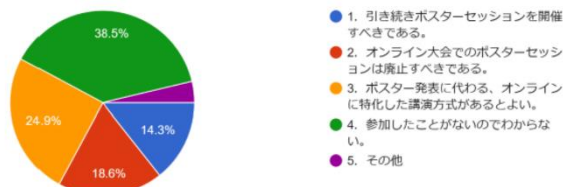
試行的に、2025 年春季大会にて Zoom の同時翻訳字幕機能を導入していることがアナウンスされた。

本大会ではないが、別学会で Zoom の翻訳機能を使用したところ、好評であったという例が報告された。

【オンライン大会でのポスターセッションのあり方について】

物理学会事務局が行ったアンケート（右図）で、オンライン大会でのポスターセッションに否定的な意見が多かったことを受けて、ポスターセッションについての議論が行われた。

Q4.
2026年春季大会以降のオンライン大会でのポスターセッションの在り方についてご意見ください。
377 件の回答



出席者の中でも、現状に不満を持つ人は多く、アンケートにあった具体案「ショートプレゼン(+ブレイクアウトルーム)、ショート動画の事前投稿(+コメント欄での質疑)」やその他の可能性について議論が行われた。

主な問題点

- ・聞き手としての参加者がそもそも少なく、発表者が待ちぼうけを食らっている。
- ・ブレイクアウトルームに入って1対1になると、抜け出しづらくなるため、現地での開催に比べて、聞き手としても少し気軽さが減っているのでは。

改善案

- ・オンラインでも、もう少し現地に近い雰囲気になるサービス(Spatial chat, Gather など)もある。ただし、なかなか発表者が聞き手を捕まえに行くようなことは再現できない。そもそも形式としての限界があるかもしれない。
- ・ショート動画の事前投稿などは、それだけで聞き手が増えるかどうかは疑問だが、発表者が待ちぼうけを食らう負担は減らせるはず。
- ・そもそもオンラインでのポスター形式は限界があるので、短めの口頭発表にしても良いのではないか。その場合、通常の口頭発表とどう差別化するか？例えば質疑応答をなくしても良いかもしれない。
- ・ポスタープレビューのようなものを設ければ、その後ブレイクアウトルームで待ちぼうけを食らったとしても、一応全員に聞いてもらえたということにはなる。ただし、ポスタープレビューにポスター参加者以外の聞き手が来てくれるように、さらに工夫が必要かもしれない。
- ・現状、ポスター発表は全く別の隔離された部屋での開催という感じになっており、そもそもいつ行われているか知らない人も多そう。関連の口頭セッションのあとにポスタープレビューを持ってくると、そのまま聞いてくれるのではないか。

注意点

- ・そもそも、ポスターは口頭発表にはまだ不安の残るような内容の発表が多いという実情を踏まえると、大勢の前での発表になっても気軽に登録できるような配慮があると良い。(例えば質疑応答時間をなくす?)
- ・ショートプレゼンを考える際に、若手の発表を増やすという意味では、教員が多いと学生が気後れするかもしれないので、何か配慮できると良いかもしれない。

【80周年記念国際シンポジウムに関して】

2026年に日本物理学会が誕生（正確には日本数学物理学会から分かれて再出発）してから80年となる。その記念事業として、2026年9月に東京大学（駒場キャンパス）で開催される第81回年次大会（2026年）の前日にあたる9月13日に、80周年記念国際シンポジウムを開催するとともに、国内外の研究者によるサテライトセッション（英語によるシンポジウムに相当するもの）を大会期間中に行うことが計画されていることがアナウンスされた。

議題5：その他（永崎）

- 次回のインフォーマルミーティングの日程について

次回学会(広島大学)でのインフォーマルミーティングは3日目(9月18日)の昼からの開催予定とした。

- オンラインでのタイムキーパーについて

現状オンラインでの発表時間は各自管理となっている。座長・運営委員のマニュアルにバーチャル背景として時間を表記するための動画があるが、ややこしくて良く分からない。Zoomに付属のタイマーアプリ(下記URL)は使い勝手も良さそうなので、マニュアルで紹介すると良いのではないか。

https://support.zoom.com/hc/ja/article?id=zm_kb&sysparm_article=KB0068678

- 学生賞の運用について

現状、学生賞運用のためのアカウントの引継ぎに、セキュリティの問題などから時間がかかるため、新しいものを用意しても良いかもしれない。

- SCES 2026 の日本開催について

石田憲二氏（京大理）より、SCES 2026 が2026年9月27日から10月2日の期間、富山国際会議場で行われることがアナウンスされた。

以上